

## ぴゅあ総合男女共同参画推進月間記念講演会を開催しました

ぴゅあ総合では、歴史学者の平山優さんをお招きし、去る6月9日（日）に「戦国時代の女性の地位とその役割」のタイトルでご講演いただきました。

まずは平山先生、戦国時代はいつ自分の住んでいるところが戦場になるかわからない不安な時代、誰もが死ぬときは死ぬ、命がけの時代ですから、武家、公家、庶民、身分や立場によって命がけの意味は変わります。悲惨であることは今も昔も変わらないですが、政略結婚の駒など、武家の女性の悲劇性がクローズアップされがち、ということはあるでしょうね。とおっしゃいます。

平山先生の面白いお話を詳しくお伝えすることができず、荒っぽくまとめてしまいますが、やはり武家の社会になったことが歴史上の大きな転換点とのこと、平安時代の、夫が妻の家に行き、子どもが生まれたら母親の実家で育てる招婿婚しょうせいこんから、妻が夫と同居する嫁取婚よめとりこんへの移行、これが一般化することにより家を軸にした一族の結合が強くなっていきます。

そこで家長である男性・家を統率する人＝男性＝「家父長」制が成立し、父、親権者、家長である男性に大きな権限が、女性（妻・嫁）は家に付随するものになっていきます。

このように書く戦国時代の女性はみじめな存在であったのかと悲しくなってきましたが、中には陰に日向に活躍して歴史を動かした女性が少なくありません。

文字として明確に記されてはいませんが、数々の史料を紐解いていくと、女性が戦国時代のパワーゲームの中で積極的に動いていたことがうかがえます。

16世紀前半、甲斐国の小山田越中守信有と武田信虎が対立した際に、両者の取りなしを実家の伝手をたどって今川氏に依頼した小山田信有の生母、中津森御大坊様なかつもりおだいぼうのこと、今川氏親の正妻、寿桂尼じゅけいにのこと、また大河ドラマ「どうする家康」で徳川家康の正妻、築山殿が「正妻の役割」として「妾」の選抜を行っていたシーンは歴史的に見ても正しいということなど、古文書を単に読んで推理するのではなく、あらゆる史料をあらゆる角度から検証して最も蓋然性の高い説を導き出す文献史学の面白さを、平山先生はお話してくださいました。

中でも寿桂尼は有名な女性ですが、夫である今川氏親の死後は自分の名で朱印を発行するなど領国をよく支配し、長く今川家を支えた偉大な女性です。1568年に武田信玄がそれまで今川・北条と結んでいた三国同盟を破棄して駿河に侵攻したことも、同年に寿桂尼が亡くなっていることから、武田信玄が彼女の死を待って侵攻したのではないかと先生はおっしゃいました。

また、武田勝頼が文献に「武田四郎」として登場するのは元亀元年12月、これは武田信玄の正妻である三条夫人が同年3月に死去したことが関係し、生前彼女が勝頼の家督を決定していたとされるなど、社会制度上は制約も多く「男女平等」ではない存在ですが、時に勇ましく戦乱の世を生き抜いてきた様々な女性の姿をお話してくださいました。

盛りだくさんのお話の中、最後に平山先生が面白いことをお話くださいました。

沼津市千本浜の首塚から出土した頭蓋骨は中世の合戦によるものとされ、全体の約34%が女性だったそうです。首を取って手柄、名誉とするこの時代にあって、女性がある程度含まれていることは、戦の前線に立った女性兵士がいた可能性あるとのこと、巴御前のような侍大将がいたのかもかもしれません。

平山先生のお話を皆さんが真剣に聞いている姿からは、長い歴史の中で男女の役割やジェンダーも変化してきたこと、時に苦しく悲惨な戦乱の世でも女性がしっかりと生きてきたことを知っていただけたことをうかがわせました。

当時はこうだったけれど、今はどうだろう？と考えるきっかけづくりになれば、今回の講演会の役割は果たせたのではないかと思います。

現在でもその名残はありますが、武家社会の成立とともに生まれた「家」の制度は戦後の民法改正でなくなりました。この社会を変えようとたいへんな苦勞をした女性たちがいて、現在があることも事実です。今度は私たちがどのような未来を女性たちにつなげていけるか、どのように歴史に描かれていくのかを考えた時、男女共同参画推進センターの役割とは何かを改めて考えさせられました。

全国を駆け回り多忙を極める中、最新の研究成果を惜しげもなくお話して下さった平山先生、どうもありがとうございました！

